

学校支援の在り方

一 センターのシンクタンク機能を活用した研究支援を通して 一

主 幹・指導主事 鶴田 博
主 幹・指導主事 小山三枝子
副主幹・指導主事 芦沢 令子
主 査・指導主事 小野 圭

キーワード 学校支援 学級集団づくり センターのシンクタンク機能

I 主題設定の理由

令和4年度の山梨県学校教育指導重点では、確かな学力の育成、豊かな心の育成、健やかな体の育成、地域や世界で活躍できる人材の育成、特別支援教育の推進に向けて、教育活動の根底をなす教員と児童生徒との信頼関係や児童生徒相互の良質な人間関係を育てるために、その土台となる学級経営・ホームルーム経営・学年集団づくりに取り組むこととなっている。

こうした背景の中で、昨年度から本年度の2年間、研究推進校（以下、推進校という）である甲斐市立竜王北中学校は、「自己肯定感を高め、豊かな人間関係を築ける生徒の育成」という研究主題と、「生徒一人一人を生かす望ましい学級集団づくりを通して」という副主題のもと、学習指導と生徒指導を両輪と考え研究を進めている。

一昨年度は、学習指導を中心として、「自ら学力を身に付けた生徒の育成」について研究を進め、One Page Portfolio（以下、OPPシートという）の活用に焦点を当てた指導が展開され、その充実を図り、昨年度からは、学級の仲間との協働や対話、表現などの学級集団や学年集団づくりを軸にすることで、学習指導・生徒指導の両輪が相互に関連しながら、どちらも向上していくことをねらっている。

また、これまで本研究チームで行った研究から得た課題に、「推進校に対する支援の在り方について検討する必要性」があげられているため、推進校の負担感をいかに軽減させていくかも研究を行う上での大事な要素になってくると考えた。

そこで、本研究では、推進校の要望を基に、学校主体の研究を前提とし、推進校が要望する内容に対して、山梨県総合教育センター（以下、本センター）の山梨教育における「知の拠点」としてのシンクタンク機能を活用した学校支援をしていくことを目指すこととした。

II 研究の目的

推進校が実施するOPPシートを基に、教員の抱えている学級経営に関する課題を推進校と共有するなかで、推進校が目指す生徒像や学校像の確立に向け支援を行う。また、推進校の要望に応じた形で進めるなかで、教員支援を通して、学校支援の在り方として、今年度の支援方法が有効かどうか検証していくこととした。

III 研究の方法

本研究では、以下のような取組を学校支援として取り入れた。

- ①推進校の先生方が校内研究で使用しているOPPシートや推進校との打ち合わせを通して、学校の課題、または教員の悩みや不安を集約するとともに、目指す生徒像を共有していく
- ②推進校が要望する支援要請を基に、本センターのシンクタンク機能を生かした支援を行う
- ③OPPシートを基に、教員の変容を掴み、支援の在り方を検証する

IV 研究の経過・取組

1 推進校の要望に応じた支援

（1）校内研究に沿った支援

推進校では、昨年度からの2年間、「自己肯定感を高め、豊かな人間関係を築ける生徒の育成」という研究主題のもと、「生徒一人一人を生かす望ましい学級集団づくり」に取り組んできた。学級の仲間との協働や対話、表現などの学級集団や学年集団づくりを軸にすることで、学習指導・生徒指導の両輪が相互に関連しながらどちらも向上していくことをねらって研究が進められている。

それゆえ、学級経営や自己肯定感を高める取組の充実に向けて、学校主体となり、学校の要望を基にして、本センターのシンクタンク機能を活用した支援を大前提とした。表の年間計画を立案す

るにあたり、推進校との打合せを複数回実施した。先生方の想いや課題を共有し、学校の要望を受け、年間の中で、支援の場面をともに設定した。

表 推進校 校内研究年間計画

回	日にち	項目	内容
1	5月16日(月)		校内研究提案と検討会 教師集団によるワークショップ
2	5月中旬～下旬		第1回Q-U実施
3	6月28日(火)	学習会	Q-Uを活用した集団づくり 講師：センター
4	7月13日(水)	学習会	不登校の現状と支援 講師：センター
5	8月23日(火)	学習会	子どものメンタルヘルスを守る クラスづくり 講師：川本 静香先生 (山梨大学准教授)
6	9月21日(水)	学習会	Q-Uを活用した活動実践発表 研究授業指導案検討
7	9月中旬～下旬		第2回Q-U実施
8	10月19日 (月)	学習会	Q-Uの分析と取組活動決定 指導案検討
9	10月28日 (金)	公開研究会	研究授業(道徳と特別活動) 研究会
10	11月21日 (月)	学習会	Q-Uを活用した活動実践発表
11	1月10日 (火)	学習会	Q-Uを活用した活動の振り返り
12	2月8日(水)	学習会	本年度のまとめと反省 次年度の研究の方向性

(色付きは、本センターが関わった校内研究)

(2) 推進校の要望把握

推進校からの要望は大きく2つある。

①学習会支援

- ・「楽しい学校生活を送るためのアンケート hyper-QU」(河村ら2004 以下、Q-Uという)を活用した学級集団づくり
- ・不登校の現状と支援
- ・子どものメンタルヘルスを守るクラスづくり

②公開研究会支援

- ・授業指導案検討
- ・公開研究会当日の支援

中でも、学級経営の充実や生徒の自己肯定感向上を図るため、先生方が抱えていた悩みと強い不安感や課題を把握し、学校の目指す生徒像を共有したうえで研究を進めたいというものであった。計画を整えた後も、推進校との打合せを随時行

い、その都度要望に沿った形で推進校の校内研究を支援した。

(3) 各種学習会への講師派遣

校内研究の計画に沿って、推進校の要望に沿った学習会を行った。内容は以下のとおりである。

- ①6月28日 講師 本センター指導主事
「Q-Uを活用した集団づくり」
- ②7月13日 講師 本センター指導主事
「不登校の現状と支援」
- ③8月23日 講師
山梨大学 准教授 川本 静香先生
「子どものメンタルヘルスを守るクラスづくり」

学校全体が共通認識のもとチームとして学級づくりに取り組む意識をもつことができ、年度の後半に向けた学級集団づくりにつながる内容となり、校内研究を深める一助となった。

2 各種学習会について

(1) Q-Uを活用した集団づくり(6月学習会)

推進校は、甲斐市の「豊かな学び・豊かな育ち」推進事業の指定校でもある。それを踏まえ、Q-Uを中心に据えて研究を進めていくことを確認する中で、今年度もQ-Uの活用に関する支援の要望を受け、6月に学習会を実施した。推進校からの要望は以下のとおりである。

- ①Q-Uの見取り方と注意点
- ②Q-Uの活用(チームで活用)
- ③学級経営に不安を抱えた教員のスキル獲得
- ④指導の方法や生徒との関わり方について

この内容を踏まえ、学習会を設定・実施した。講義を本センター指導主事が行った後、実際に推進校で実施したQ-Uの結果を用いて、全教員が学年ごとに分かれてグループワークに取り組んだ。

グループワークでは、学級の状況把握と分析を行い(図1)、今後の方針を決定した。



図1 グループワークの様子

グループワークの流れは以下のとおりである。

①学級の現状について担任からの報告

Q-Uの結果や日常の様子から、担任が学級集団の特徴や気になる生徒を報告する。参加者は質問しながら状況を把握するとともに、他の情報を共有する。

②学級の状態の評価と方針の決定

Q-Uの結果や担任等の報告を受け、参加者で該当学級のルールやリレーション（互いに構えない、ふれあいのある本音の感情交流のある状態）の確立度、Q-Uの型を見立てる。それを基に、担任が学級づくりの当面の方針として「ルールの確立」または「リレーションの形成」のどちらかを選択する。

③具体的な対応の提案

担任の選択した方針を踏まえ、参加者でこの学級に対する具体的な対応の提案を行う。ここではブレインストーミングを用い、批判しない、自由に発言、質より量、アイデアの結合を意識する。

④具体的な対応の決定

参加者から提案されたもの、または担任が考えているもの、意見を融合・アレンジしたものなど、これからこの学級で実行することを、担任が3つ決めて参加者に宣言する。参加者の拍手で終了する。

※①～④の流れを全ての学級で実施する。

※学年ごとに学級の方針と具体策をまとめ、参加者で共有する。

Q-Uの結果からは、個々の児童生徒、学級集団、学級集団における児童生徒の相対的位置を把握することができるが、それが児童生徒からの評価であることが重要なポイントである。担任から見た学級像、担任以外の教員から見た学級像、児童生徒から見た学級像には必ず差異が生じるため、児童生徒の実態と指導法にミスマッチが起こりやすい。Q-Uはそのような差異を把握し、児童生徒と教員の実態に合った具体的な方策を考える大きな手立てとなる。

実際に推進校で行ったグループワークでは、参加者がそれぞれの学級を分析し、アイデアを出し合い、活発な意見交換が行われた。ワーク後のOPPシートに記述された感想からは、この活動の意義が明確に見える。まず、「他の先生方からアドバイスをいただいたことや、多くの先生方が見て

くださっていると実感し、安心感がもてた」という感想が多く見られた。「一体感のある指導をしていくことができる」など、特に、担任にとっては自分の学級を客観的に見る機会となった。また、これまでの学級経営を振り返る機会になっていることもあげられる。「全体を見た取組が必要になる」「それぞれの役割で強みを生かし指導していくことが大切」など、Q-Uの結果と併せて各々が指導や関わりを顧みる動きが出ていた。

今回のように、Q-Uのデータを基にルールに則って話し合いを行うことで、誰からも意見が出しやすくなるといえる。前向きな意見が出る仕組みとしてブレインストーミングの効果も大きい。このような活動が教員間で意見交換しやすい雰囲気づくりのきっかけとなり、学級経営は担任のものであるという学校文化に風穴を開ける動きにもなっていくはずである。

Q-Uは学級把握だけにとどまらず、校内連携促進のツールとして大きく機能するといえる。

(2) 不登校の現状と支援（7月学習会）

推進校の要望の中に、不登校に対する課題があげられた。不登校は、多くの学校において課題としてあげられるひとつであろう。その中でも推進校においては、入学時からの不登校者数も多く、課題意識が非常に高いため、本学習会を設定・実施した。

不登校に対する国からの文書や通知を基に、現在の考え方や、不登校者数の推移を基に現状の把握、具体的に不登校生徒を仮定した中での対応例（図2）や対応に関するワークを実施した。

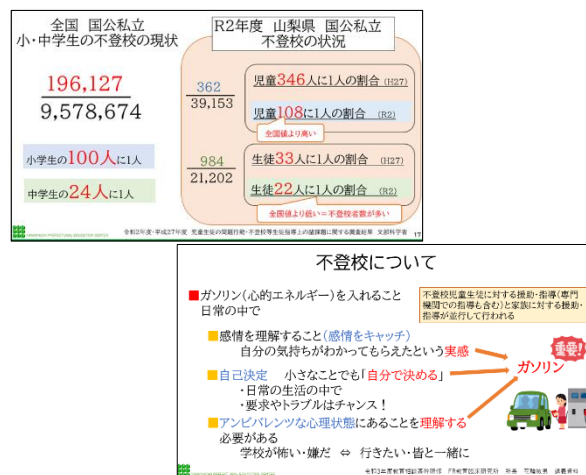


図2 学習会資料の一部

学習会後のOPPシートに記述された感想からは、「不登校増加の解決に向けて多くのヒントをもらった」や「どんな風に登校刺激を与えるのか、具体的にイメージできた」という感想が多く見られ、不登校生徒や保護者などの実際や、アプローチに対して共通理解されていることが感じられた。また、「よかれと思ってかけた言葉が逆に生徒を困らせてしまったり、追い込んでしまったりすることがある」など、教員が投げかける言葉に対する配慮や注意点などもあげられた。各学年・学級が置かれている現状を踏まえながら、具体的なアプローチ方法や支援の方法について、担任を中心としたチームでの関わり方を顧みる動きが出ていた。

(3) 子どものメンタルヘルスを守るクラスづくり (8月学習会)

コロナ禍を生きる子どもたちのメンタルヘルスに関する問題について、推進校の要望を基に、アドバイザーでもある山梨大学准教授、川本静香先生を講師として派遣し、「子どものメンタルヘルスを守るクラスづくり」学習会を開催した。(図3)



図3 学習会の様子

コロナ禍における子どものストレスや学校でのコミュニティアプローチ(教育的教育相談)、SOSのサインや居心地をよくするためのクラスづくりのポイント、一人一人を大切にするクラスづくりのポイント(図4)などについて学びを深めた。

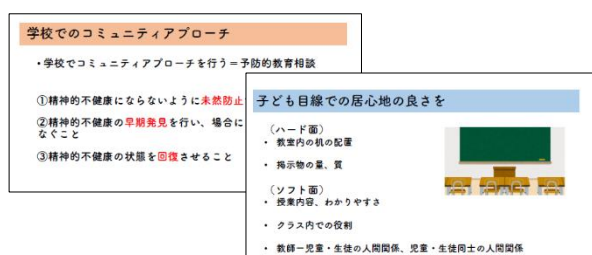


図4 学習会資料の一部

学習会後のOPPシートに記述された感想からは、「見ようと思わなければ見えない不調があるのは改めて気づかされた」や「学校が担う役割の大きさを痛感した」など、コロナ禍における生徒の状況を改めて把握し、支援していくことの重要性を再認識する場となった。また、「類似性だけでなく、相補性も重視できる環境づくりが大事」や「少しずつ意識することで環境を変化させ、よりよいクラスづくりをしていきたい」など、現代の状況下にある生徒へ、改めて先生方が意識を向け、関わり方を再確認できる場となった。

3 公開研究会について

推進校は、甲斐市の「豊かな学び・豊かな育ち」推進事業として、10月に公開研究会を実施した。実施した内容は、全体会・各学年授業公開・各学年研究会である。

公開研究会に向けて、推進校が求める要望に応じ、本センター指導主事も全体会内で研究への支援内容や支援の経過について発表した。(図5)



図5 公開研究会・全体会の様子

授業を構成するにあたり、推進校と複数回、打合せを行った。その中で、授業を構成する上でのポイントについて本センターのシンクタンク機能を生かし、支援を行った。

1年と3年が道徳科の研究授業、2年が特別活動の研究授業を実施した。授業者は7月に実施したQ-Uの分析を生かし、実践の中で、『リレーションづくり』に主眼を置き、集団づくりに取り組んできた。授業内では、意見を交流し合う活動を頻繁に仕組み、どの学年の生徒たちも積極的に参加する様子が見られた。

研究授業で指導者は、事前アンケートを大型ディスプレイで表示し、生徒の考えを可視化、共有することで一人一人の考えを支持し、授業を展開していく。また、他の授業では、生徒の考えを付

箋紙と小型ホワイトボードを利用し、グルーピングを行いながら提示することで共有していくことや、授業内でフリーウォーク&トークを仕組み入れるなど、学級内での人間関係が必要となる場面をあえて組み入れていく授業を展開した。(図6)



図6 公開研究会・研究授業の様子

研究授業後の研究会は、3グループに分かれ、「他の人の意見を参考にし、実践意欲が高まっているか」「教材からの学びを自分自身との関わりの中で深め、実践意欲が高まっているか」をベースに意見を交換していった。授業の流れや題材の在り方などについて活発な意見が出され、授業者・参加者がそれぞれの経験則を共有し、学び合う場となり、教員は授業づくりに関する理解を深めた。(図7)



図7 公開研究会・研究会の様子

V 研究のまとめ

1 教員の変容の見取り

本研究チームは、推進校との打ち合わせや校内研究会後に記入するOPPシートを基に、教員の抱えている学級経営に関する課題を推進校と共有するなかで、推進校が目指す生徒像や学校像の確立に向け、教員の支援を行った。

支援の在り方は推進校の要望に応じた形で進めることとし、本センターのシンクタンク機能を生かした支援を行うことが学校支援の在り方として有効か検証した。

① ツールを使ったOPPシートの見取り

OPPシートに書かれた学習会後の感想をテキストマイニングツールで集計すると、「生徒」「アプローチ」「コミュニティ」などの語句が頻出していることがわかった(図8)。同様に階層的クラスタリングで集計すると、「学級」「学年」「教師」「子ども」「環境」などの名詞が「共有」「必要」「大切」といった名詞とつながり、「よりよい」という形容詞で階層されていることがわかった(図9)。

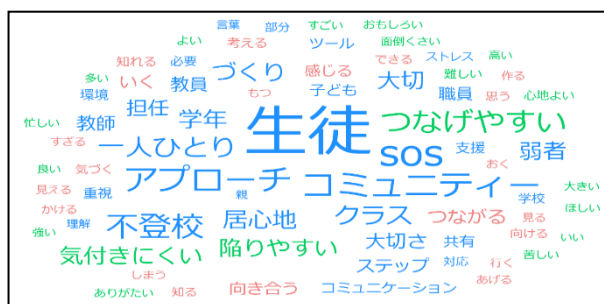


図8 テキストマイニングツールによる集計

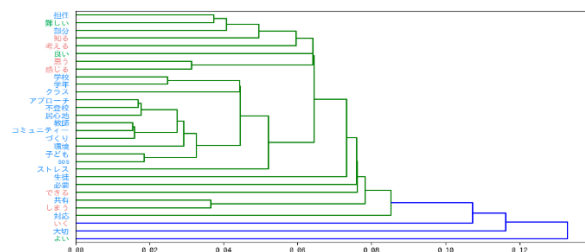


図9 階層的クラスタリングによる集計

② 研究を通しての職員アンケート

12月に推進校の先生方を対象にアンケートを実施した。「校内研究を通して、より深い生徒理解ができた」「校内研究を通して、予防的な取組が意識できた」「教職員間で、生徒理解

のための意見交流の機会が増えた」の3項目については、「非常にそう思う」「そう思う」「そうは思わない」「全く思わない」の4段階で回答をいただいた(図10~12)。また、「予防的な取組として実践したこと」については自由記述の形式で回答をいただいた。「学年全体での状況把握」「生徒とのコミュニケーション量を増やす」「よく観察する」「Q-U分析から、気になる生徒を注意深く観察する」などの記述がみられた。

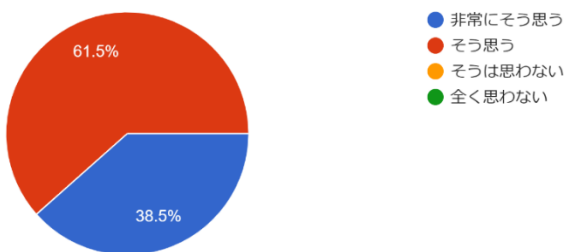


図10 職員アンケート
「校内研究を通して、より深い生徒理解ができた」

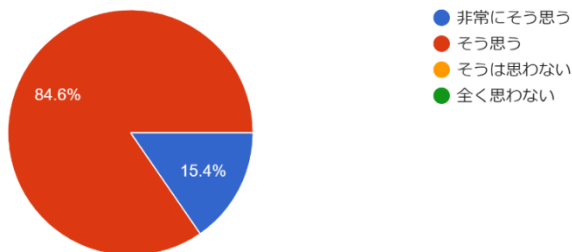


図11 職員アンケート
「校内研究を通して、予防的な取組が意識できた」

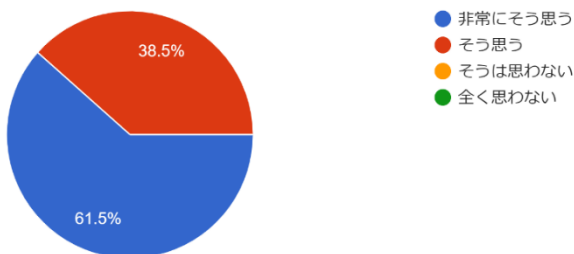


図12 職員アンケート
「教職員間で、生徒理解のための意見交流の機会が増えた」

2 成果

昨年度の研究より、学習会を通して担任一人が抱え込むのではなく、教員集団で、チーム学校で、組織的に学級づくり・学年集団づくりに動いていくことの重要性についての共通認識を教員全体で確認できた。今年度も同様に学習会を実施し、学習会の中で交流することを通して集団づくりに不可欠なより深い生徒理解と日常生活における予防的な取組について検討することができた。学習会は学校が抱える課題や教員一人一人の不安を基に企画立案が進んだので、推進校では自分事として課題に向き合う姿が見受けられた。

一方、職員アンケートでは、全ての項目で「非常にそう思う」「そう思う」の肯定的な回答であった。また、自由記述からも学校全体での取組の大切さをうかがえる記述がみられた。チームとしての取組を考えたとき、まず様々な立場の教員で意見交流することの有用性を教員が感じているのではないかと。そして、意見交流する機会が増えたことでより深い生徒理解につながり、その中から予防的な取組が展開するものと考えられる。

以上のことから、推進校の実態や要望に応じた支援は、支援の在り方として有効であったと考えることができる。

3 研究を通して

推進校や大学アドバイザーの先生方より、以下の感想や意見をいただいた。

① 学校長より

- ・学校の研究テーマや課題に対し、センターの指導主事や大学の先生から直接指導や助言をもらったので、納得感が大きく実践につなげることができた。
- ・疑問に感じたことや困ったことに対し、すぐに相談できる体制だったので、安心して校内研究を進めることができた。

② 大学アドバイザーより

- ・学校のニーズ、学校の実態に沿った研究支援の成果がわかりやすく示されている。センターのシンクタンク機能の有用性が明らかになったのではないかと。
- ・学校のニーズや課題を丁寧に把握しながら、センターのシンクタンク機能を活かした支援と、教職員同士の交流による気づきや生徒理解、課題解決を通して、チームとしての協働

性を高め、教員としての成長を促すような支援が、学校にとって素晴らしい支援となっていると感じる。

- ・推進校の研究過程においてOPPシートの分析等により具体的な支援を行ったり、センターの強みを生かして専門家による学習会を実施したりしたことなどが、個々の教員の力量を高めると共に教職員の共通理解や協働性を生み出し、学校全体の研究のレベルアップにつながったのではないかと。学校の実態やニーズに寄り添った素晴らしい支援ができたと思う。

4 おわりに

2年間の研究支援は学級や学年などの推進校への支援をテーマにしていたので、生徒一人一人への個別の事案に対してはアプローチができなかった現状がある。一方で、教員の個や集団に変容がみられると、生徒にも変容がみられることは確かである。教員の負担の軽減を図りつつ、生徒指導の充実を図ることは、「令和の日本型学校教育」を支えるための重要な要件である。チーム学校として機能するためにどのような支援が必要か考えていきたい。

最後に、推進校の先生方には2年間研究支援についてご協力をいただき感謝している。

【引用・参考文献】

- ・令和4年度 山梨県学校教育指導重点
山梨県教育委員会
- ・いじめ・不登校対応必携（教職員用指導書）
山梨県教育委員会 令和3年3月改訂
- ・中学校学習指導要領 総則編
文部科学省 平成29年
- ・児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果
文部科学省 令和2年
- ・不登校児童生徒の実態把握に関する調査報告書
文部科学省 令和3年10月
- ・生徒指導リーフ
文部科学省国立教育政策研究所 Leaf.18
- ・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
文部科学省国立教育政策研究所

- ・落ち着いた学級づくりにむけて
～Q-U, hyperQ-Uを活用した課題対応～
岡山県教育庁人権教育課 平成31年3月
- ・教育相談基幹研修会資料 令和3年度
- ・河村茂雄 他 編著 Q-U式学級づくり
図書文化社
- ・河村茂雄 編著 実証性のある校内研究の進め方・まとめ方～Q-Uを用いた実践研究ガイド～
図書文化社
- ・河村茂雄, 粕谷貴志, 武蔵由佳, 藤村一夫 (2004)
Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド
小学校編 図書文化社
- ・ユーザーローカル テキストマイニングツール
(<http://textmining.userlocal.jp/>) による分析

【研究推進校】

甲斐市立竜王北中学校 校長 依田 宏記

【山梨大学連携研究会アドバイザー】

山梨大学	准教授	川本 静香
山梨大学	客員教授	桐原ひかる
山梨大学	客員教授	秋澤 英俊

【総合教育センター研究アドバイザー】

相談支援センター長 玄間 修